

戦時下の泣くに泣けない 笑うに笑えない けつたいな 想い出ばなし

三中39回 川 上 のぼる（登）

昭和十八年入学、昭和二十三年のまるまる京三中の教育をうけた年代なのである。処で中学三年の夏、昭和二十年八月十五日、残念ながら敗戦をむかえ、その後、学制改革があり新しい時代に入るのである。吾々は戦中、戦後の少年期を過ごした京三中最後の第三十九回卒業生であります。さてその間、昭和十九年頃から戦況思わしくなく、日に日に激しくきびしいものになって参りました。授業も軍事教練の時間が増え、指導教官も京都師団直属の配属将校が赴任！ 吾々が入学した当初、一年生の頃はやさしい現役バリバリの将校さん。それが昭和十九年頃から鬼の配属将校！ 新川中尉殿に変身！ 多分二年生の時だったと記憶していますが、教練の時間は二クラス単位で行われていた。当時、木銃で銃剣道の練習、担当教官に退役軍人

の万年准尉殿五十嵐トンちゃん先生であつた。広い校庭では百人余りの生徒一人ひとりに目が届かないのは当然。トンちゃん先生の指導をうけているのは前列の生徒二十人程度、他の生徒は手持ち無沙汰で校庭の石ころを拾つてた、バーン！バーン！と射撃訓練よろしく、投石ごっこをしていた。指導中のトンちゃん先生は気付かなかつたが、教官室でそれを見ていた鬼の配属将校新川教官が飛んできて、その石ころを投げていた生徒、クラスで一番小柄な生徒（名前を発表するのを許されよ。事実故に）富士栄敏雄君の腹部のあたりを将校の長靴で一蹴り、正に十六文キックされながら、その時の富士栄君の身体が五メートル余り宙に舞い上がったのが未だに脳裏から離れません、当の富士栄君はグラウンドに舞い上がり無事着地！自然体の受け身だつたのか？鮮やかあざやか。しかし恐ろしい時代でしたネ。また、こんな事もありました。大東亜戦争がきびしくなり、教員の数が足りなくて、校内の植木の手入れをしていた植木屋のおっちゃんや修練の授業に臨時教員として雇われ、自称『先生』のお話。私事で恐縮ですが我が家の庭師として出入りしていた植木やはんが名門京三中の臨時教員ですぞ！当のご本人夏でも冬でも国防色の厚い生地軍服まがいの作業服に、ゲートルを巻き、腰には手拭いをぶら下げ。戦闘帽をななめにかぶり、とても臨時とは言え教員とは思えない出で立ち、

そこで吾々生徒がニツクネームをつけたとさ！『植木ヤー！植木ヤー！』と。すると当の植木や先生機嫌が悪い、それもその筈、で自分で『先生』呼ばわり。そこで皆んなで考えたのが英語で言う『ガードナー』だった。本人の先生の先生、何の事かさっぱり解らんから、僕に『川上、皆んなが俺のことをガードナーと言うてるが、あれはなんのこっちゃ？』『ハイ！それはドイツ語で修練の先生と言う意味です』と申し上げたら大変喜んで、自分でもガードナー！ガードナー！と胸を張って手拭い腰にぶら下げて闊歩してました。因みにガードナー先生の授業と言うのは雑草むしり、落葉掃除、校内の廃棄物进行处理する様な作業（一応授業としておきましょう）が終ると、参加した生徒を二列横隊に並ばせて、一言訓辞があり解放すると言う段取り。最後にガードナー先生に拳手の答礼、これが又『怪体な』答礼、右手の五本の指を揃えて伸ばし、帽子のひさしに当てるに、何故か薬指と小指がまがっている、損傷している感じでした。勿論、常時手袋をしていたからハッキリした事はわかりませんが？ひよつとしたら・・・ひよつとしているんだはないですか？

戦時中でいくら人材に不足していると言っても、これでは名門校の生徒が可愛い想。

。おーおー！ 三中その名ぞ、吾等が誇り！